

全国風穴サミットの紹介

全国風穴ネットワーク
事務局長 傘木宏夫

はじめに

全国風穴サミットは 2014 年夏より始まって以来、風穴をめぐる実践や研究の交流を通じて、各地の風穴仲間の活動を励まし合うことを目的に回を重ね、今回で第 10 回となる。この間の歩みを簡単に紹介する。

1. 自己紹介 ～NPO地域づくり工房の取組み～

(1) 市民からの仕事おこし

私が代表を務めるNPO地域づくり工房は、長野県大町市、立山黒部アルペンルートの玄関口にあたる人口 26,000 人余の小さな町を拠点に活動している。2002 年 10 月に発足して今年 20 周年となります。「市民からの仕事おこし」を掲げ、ミニ水力発電や菜種ヴァージンオイル、そして風穴小屋の復元利用など、地域の資源を生かした活動を進めている。

(2) 2つの風穴小屋の復元・利用

風穴小屋の復元活動は 2005 年より立ち上がった。現在、かつて大町市内にあった 3 つの風穴小屋のうち、猿ヶ城風穴小屋と鷹狩風穴小屋を復元し、管理している。

猿ヶ城風穴小屋は、国内で最も標高の高いところにある風穴小屋であると言われて、近くの山城とあわせて、見学用に利用している。

鷹狩風穴小屋は、かろうじて車で行くことができるので、地場産品の高付加価値化に向けて利用している。たとえば、地元の仲間の協力で、菜の花の緑肥で醸した純米原酒と、蕎麦焼酎とを風穴小屋で熟成させています。また、リンゴやコーヒー豆の熟成なども手掛けている。

(3) 冷風の丘

全国風穴サミットでの交流を通じて「風穴植生」ということを知った。そして、地元で発見したのが「冷風の丘」と私たちが名付けた場所でのミヤマハナゴケやコガネトコブシゴケ、マキバエイランタイなどの地衣類の群生地である。2018 年に日本地衣学会による調査を組織し、その後も調査を継続している。

2. 全国風穴サミットについて

(1) きっかけ

サミット開催のきっかけは、2013 年夏、私たちが復元・利用している風穴小屋を見学されに、自他ともに「風穴伝道師」を認める清水長正さんが、福井県の越前おおの農林楽舎の方を伴って、来られたことから。このとき私は、風穴の科学があり、実践する仲間が各地にいることを知り、交流してみたいと思い立ち、清水さんのお力を借りながら、手探りで立ち上げた。

(2)第1回サミット

第1回は「全国風穴小屋サミット」を催事名として、2014年8月に鷹狩風穴小屋がある大町市の八坂地区を会場に開催しました。予想を大きく上回る105名の参加者があり、懇親会の席上で第2回と第3回の開催地があうんの呼吸で決まり、それが今日まで続いてきた。長走風穴の鳥潟さんも第1回よりご参加いただいている。こうしたご縁のありがたさを感じる。

サミットをきっかけに、風穴ML(メーリングリスト)による交流も始まった。

(2)『日本の風穴』出版

第1回サミットでは「全国風穴小屋マップ2014」を刊行した。また、配布資料集は、清水さんに編纂していただき、大変充実した内容となった。これをもとに、古今書院より『日本の風穴』が翌年出版された。その表紙は長走風穴が飾っている。

(3)第2回サミット

第2回サミットは、2015年8月に、島根県出雲市で、長年の利用実績がある八雲風穴を市の指定管理者として運営する「八雲風穴・風太郎」が主務団体となって開催された。ここは大型バスで乗り付けることができる場所にあり、夏には多くの納涼客が訪れる。ここも、長走風穴と同様に、営林署で苗の保存に使っていた歴史がある。元首相の竹下登さんの地元で、風穴小屋には「ダイゴ」という銘柄のお酒が貯蔵されていた。なお、第2回からは、風穴をめぐる研究や実践の幅広さを踏まえて、催事名を「全国風穴サミット」とした。

(4)第3回サミット

第3回は、2016年8月に、長野県上田市を会場に「上田・地球を楽しむ会」が主務団体となって開催された。サミットまでに30ヶ所を超える風穴の掘り起こし調査を行って発表された。ダツタンソバの熟成などの実践例も紹介された。

(5)第4回サミット

第4回は、2017年9月に、長野県小諸市を会場に、氷風穴の里保存会を主務団体として開催された。「シルクのまち」としての歴史を踏まえた多面的な角度からのシンポジウムがもたれた。風穴のある「氷」集落の地域づくりの活動が発信された。

この回の成功に力を得て、風穴MLを母体として、伴野豊さん(九州大学)を代表に全国風穴ネットワークを発足することとなった。

(6)第5回サミット

第5回は、2018年8月に、群馬県下仁田町を会場に、荒船風穴友の会を主務団体として、世界遺産「荒船風穴」の歴史とその保全をめぐる地元の活動の盛り上がり合流する形で、地元新聞社が共催し、サミット会場を地場産品販売テントが囲むなど、盛大に開催された。

第2回から第5回まで、主務団体が行政や商工団体などを巻き込んで、地域振興に向けたイベントとして、数百名規模で開催され、大変にぎわいました。

(7)第6回サミット

こうした熱気を全国に発信し、知見の交流の輪をさらに広げたいと考え、第6回は、2019年7月に東京の都心部で開催した。あいにく国政選挙と重なり、全国的な発信としては不十分だった

が、過去4回が地域振興を目的としたイベントだったので、歴史・利用・自然の3テーマを設定した学びと交流は参加者から違った観点からの好評を得た。

この回にあわせて、「全国風穴小屋マップ2019」も刊行し、翌年WEBマップも公開した。

(8) 第7回サミット, 第8回サミット

第7回は、第6回の流れを受けて、テーマ性のある開催方法の試みとして、東北植物研究会が主務団体となって、宮城県白石市を会場として、準備が進められた。しかし、新型コロナウイルス感染症への対応により2020年内の集会形式での開催は見送られ、『講演・発表記録集』のみの刊行という形に代えて実施となった。記録集は、複数の研究者による査読・編集により、学術的な内容となった。

第8回サミットは、この記録集をテキストとして2021年11月、現地視察を白石市で、学習交流会と講演会を仙台市内で、対面式とオンライン式のハイブリッドで開催した。講演会は、東北植物研究会の創立40周年記念大会との共同で開催し、風穴と植物の関係について議論を深めることができた。第8回サミットの様子はWEB上に動画で紹介している。

(9) 第9回サミット

第9回は、初めての試みとして冬期の温風穴に着目し、2023年1月、秋田県大館市を会場に開催した(参加者のべ74名)。現地実行委員会には、大館自然の会、秋田北部風穴研究会、北羽歴史研究会、田代岳を愛する会、田代岳案内人の会、矢立自然友の会、矢立郷土史会などが参画し、全国からの参集者を歓待し、雪中の片山風穴の観察ツアーなどを案内した。また、林業利用(種子貯蔵)や風穴植生に焦点をあて、大館市郷土博物館における研究蓄積などが紹介された。サミットでの各報告などは『講演・発表記録』(2023年3月、全110頁)として刊行された。

また、前年2022年8月にはサミットプレ企画が開催され、風穴の不思議に関する学習会や天然記念物「長走風穴鉦山植物群落」などでの解説ツアーが行われた(64名参加)。

(10) 奥多摩・富士山麓風穴ツアー

サミット以外での交流活動の試みとして、2023年6月、檜原風穴(東京都檜原村)と富士風穴(山梨県富士河口湖町)を訪ねるツアーを、全国風穴ネットの主催で開催しました(23名参加)。地元在住の地学作家による檜原風穴経営者にまつわる話、養沢センター(あきるの市)でのバーベキューによる交流、富士風穴の洞床一面に広がる氷盤などを満喫しました。

3. サミット活動の今後

全国風穴ネットワーク幹事会の議論では、サミット活動を当面第10回までは開催していくことを確認している。また、サミットという名称や形式にこだわらず、各地の風穴の魅力を交流できる取組みを持続させていきたいと考えており、各地の風穴貯蔵酒を交流する企画や海外の風穴研究との交流なども検討している。

手探りから始まった全国風穴サミットが第10回まで回を重ねることができたことは、各地の皆様のお力添えによるものであり、心より感謝申し上げます。

以上